

社会対話の実践「環境カフェ」のオンライン化 Practice of social dialogue “Kankyo Café” online

多田 満*, 田中 迅**

TADA Mitsuru*, TANAKA Jin**

*国立環境研究所, **九州大学

[要約] 専門家と市民の社会対話の実践「環境カフェ」は、コロナ禍において 2020 年度からオンライン方式により開催している。「『コロナ禍』と環境のかかわり」をテーマに「第 1 回環境カフェオンライン」の開催では、「私たち人間はコロナから何を学ぶのか」の「問いかけ」に、参加者は「回答」(単語)とベン図による 3 つの類型にそれぞれの単語をあてはめて聞き合った結果、20 単語のうち「生活・人」への関わりは 13 単語、「地域・人間」への関わりは 15 単語、「地球・人類」への関わりは 14 単語であった。さらに Apisnote を用いて、各人の単語の関連性について結びつけて話し合った。終了時のアンケートでは、「海外と国内での対応の違い」「科学的判断と政治的判断」などに関する「気づき」があった。また、日本人学生と留学生を対象とした講義での SDGs をテーマとした「環境カフェ」は、共創型対話の実践を示した事例であると考えられた。

[キーワード] オンライン方式, 環境カフェ, 環境対話, 共感, 共創型対話

1. はじめに

「環境カフェ」は、環境研究に関連するテーマについて、参加者(高校生や学生, 社会人)の対話により専門家(研究者)と市民の理解を深め、共感を促すこと(共感の場をつくる)を目的とする環境対話イベントである。2015 年度から全国各地の大学や公共のカフェで、2020 年 3 月までに 90 回以上実践している(多田 2018a, b, 多田 2019, 多田・田中 2020a, 多田・戸祭 2018, 国立環境研究所 2020)。最近では、東京やつくば、福岡などの国内各地や国立環境研究所の一般公開(春の環境講座)で開催、さらには学生らによるアメリカやイギリス、ロシアなど海外の大学などにおける Kankyo Café の開催に取り組んできた(国立環境研究所 2020)。開催時のテーマは、自然共生や生物多様性, SDGs, あるいは『沈黙の春』などの文学からの言説なども取り上げて、環境問題を考える「共感の場」(多田 2018b, 国立環境研究所 2020)になっている。

2020 年のコロナ禍において、著者らは全国

規模の学会大会(多田・田中 2020b, 田中・多田 2020), あるいは国際会議(Tanaka & Tada 2020a, b)などもインターネット回線を用いたオンラインにより研究発表をおこなってきた。同様に 2020 年度からは、「環境カフェ」もオンラインにより、これまでの限られた地域から全国レベル, あるいは日米同時の参加者による開催(英語)をおこなっている。

そこで、本報告では、環境カフェの対面による開催(対面方式)から Web 会議システムを用いたオンライン開催(オンライン方式)の手順について、「『コロナ禍』と環境のかかわり」をテーマに「第 1 回環境カフェオンライン」の実践, ならびに九州大学(以下, 九大)の講義や九大環境コミュニケーションサークル(代表, 田中)(以下, 九大サークル)で実践したオンライン開催の概要について報告する。

2. 対面からオンライン開催へ

2020 年からはこれまでのような対面方式

が困難になり、インターネット回線を用いたオンライン方式の検討をおこなった。まず、対面方式の時と同様に「環境カフェ」の開催（日時や場所、テーマ）について認知を促すために、開催前に Facebook や Twitter などの SNS に開催の情報を掲示し、認知された環境や環境問題に関するテーマに興味・関心をもった市民が参加した（多田 2018b, 国立環境研究所 2020）。対面方式では、大学や公共のカフェなどを利用して開催するが、オンライン方式では大学の講義や学会大会などでも利用されている Web 会議システムの一つである Zoom を利用して開催した。Zoom はオンラインでの会議を実現するクラウド型のビデオチャットサービスで、パソコンやスマートフォン、タブレットなどを通して複数人でのビデオ通話を可能にするサービスである。

開催時間と参加人数は対面方式と同様に、全体で 60～90 分程度、4～8 名の高校生や大学生、院生、一般市民や NPO 会員など社会人の参加により「問いかけ」→「回答」→（類型分け）→「対話」の手順で開催した。開催時には、参加者全員が対等な立場で対話を通じてともに「学ぶ」「考える」きっかけ作りのために、参加者はテーマに関する「問いかけ」についてそのイメージや興味・関心の単語（言葉やキーワード）を参加人数に応じて各人 1～5 枚程度の付箋紙（対面方式）、あるいは Zoom 機能のチャット（オンライン方式）に記入した（回答）（多田 2018b, 国立環境研究所 2020）。

テーマに応じて 2 つ～3 つ程度の類型（「生活」「地域」「地球」や「自然」「社会」「文化」, 「自然」「社会」「生命」など）に分け、それらの関係を図式化したもの（ベン図）を用いて、それぞれの単語（回答）の当てはまるベン図の部分（番号、あるいはアルファベット）を付箋紙（対面方式）、あるいはチャット（オンライン方式）に記入した（類型分け）（多田

2018b, 国立環境研究所 2020）。またオンライン方式では、オンライン上で付箋紙を使ったワークショップを行うためのコレボレーションツール Apisnote を導入して、各人の単語の関連づけをおこなった。

さらに、各人の類型分けされた単語に関するみずからの経験（感じたこと、知ったこと、考えたこと）を公平に聞きあうこと（対話）で、テーマに関する相互理解と共感につなげる。すなわち、各人の単語を類型分けすることであらたな対話のきっかけが生まれ、また参加者は経験をたずねあうことで、あらたな「気づき」とそれによる「経験の向上」につながることを「環境カフェ」は目標にしている（多田 2018b, 国立環境研究所 2020）。

毎回の終了時には各人にアンケート調査を行い、その後に環境カフェの Facebook に開催報告を掲載した（多田 2018a）。対面方式でのアンケート内容に関しては、開催を通して環境カフェの目的である「理解の度合い」と「共感の度合い」について実施（A4, 1 枚）した（多田 2018b, 国立環境研究所 2020）。オンライン方式では、参加者がそれぞれあらたな「気づき」についてチャットに発言（記入）した。また、今後「取り上げて欲しいテーマ」についてもアンケートをおこなった。なお、専門的な内容のスライド（対面方式では印刷したもの）や印刷資料（オンライン方式では PDF ファイル）を通して、テーマに関する話題提供を必要に応じて行い、参加者の理解をより深めた。

3. 「第 1 回環境カフェオンライン」の実践

まずは、これまでに対面で参加していた高校生と大学生に呼びかけて試験的、予備的、試行的に「『コロナ禍』と環境のかかわり」をテーマに Zoom により 3 回（「第 4 回環境カフェ京都オンライン」と「第 12 回環境カフェ本郷オンライン」）開催（それぞれ 2020 年 5 月 30 日と 6 月 28 日、7 月 4 日）した。その

後、スライドの一部変更をおこない、社会人にも参加を募り同様のテーマで「第1回環境カフェオンライン」の開催（2020年7月24日（土）午前10時～11時30分）をおこなった。

はじめに「話し合い」について会話と対話、議論の違いについて示し（国立環境研究所2020）、前述の「環境カフェ」の目的とオンライン方式の手順（前章）について示した。対話について、「対等な人間関係の中での相互性がある話し方で、何度も論点を往復してうるうちに、新しい視野が開け、新しい創造的な何かが生まれる」を引用した（暉峻 2017）。そこで、相互理解と共感を促す対話を通して日常の会話から議論の合意形成につながる。なお、対話の目的である探求発見（探求による発見）については、単に何かを見つけることだけではなく、何かと何かの関係を知ることでもあり、またあることの意味をはっきり知ることでもあり、そしてさらに、あることの価値を理解することでもある。

続いて、私たちは「コロナ渦」に巻き込まれていること「コロナは私たち人間に何を伝えているのか」「私たち人間はコロナから何を学ぶのか」を問いかけ、「文明が招いた『コロナの世紀』」（科学部長・長内洋介）の新聞記事（産経新聞、2020年5月9日）を解説して、人間とウイルスとの関係について「ウイルスにとって、人はすみかであると同時に格好の『乗り物』でもある」「森林の乱開発や年の増大、グローバル化の流れが続く限り人類はウイルスの脅威から逃れることはできない」などの引用を紹介した。さらに「環境」（主体である人とのつながり、関係、相互作用）と生活と地域、地球の環境とのつながりについて解説した（話題提供）（図1, 2）。

なお、それぞれの図は、実際の「第1回環境カフェオンライン」の開催時に用いたスライドの一部で、各単語などの関係性を示すために、あえて文字の大きさを変えている。ま

た、解説の過程で、各単語等がアニメーションにより順次現れるようになっている。

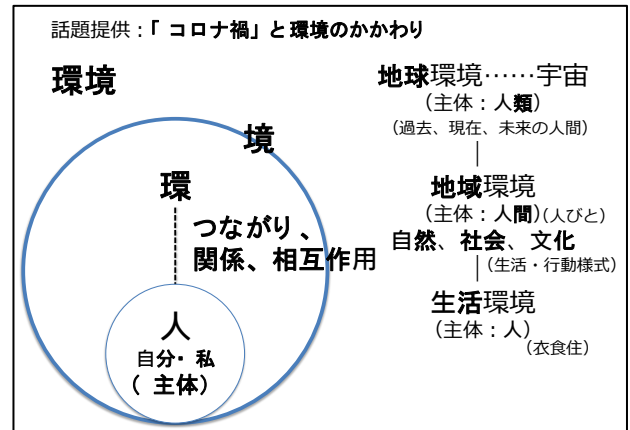


図1. 「環境」、ならびに生活と地域、地球の環境とのつながりについての模式図

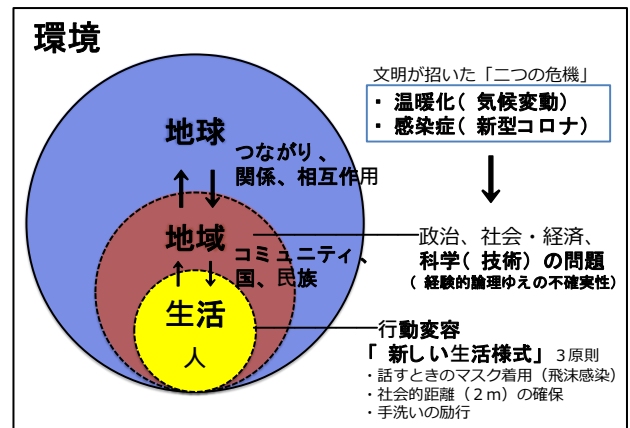


図2. コロナ禍における生活と地域、地球の環境とのつながりについての模式図

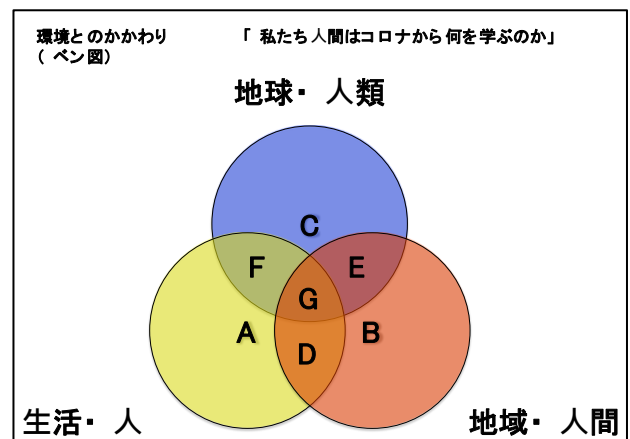


図3. 類型分けのためのベン図

つぎに参加者に「私たち人間はコロナから何を学ぶのか」の「問いかけ」に、参加者は「回答」（単語）とベン図（図3）による「生

活・人」「地域・人間」「地球・人類」の類型(7 区分)にそれぞれの単語をあてはめて、チャットで発言し(表 1) それらの関連について聞き合った。その結果, 20 単語のうち「生活・人」(ADFG)への関わりは 13 単語, 「地域・人間」(BDEG)への関わりは 15 単語, 「地球・人類」(CEFG)への関わりは 14 単語であった。その後, 地域環境である「自然」「社会」「文化」の類型(7 区分)に多田の単語(「密集と移動」のリスク, 「科学と政治」の関係, 「DX」の必要)をあてはめてみせた。

表 1. 「問いかけ」(私たち人間はコロナから何を学ぶのか)の「回答」(区分と単語)

区分	単語(言葉やキーワード)	単語数
A		0
B	地方特有の病気の広がり, 科学と政治, DX(デジタルトランスフォーム)	3
C	環境収容力	1
D	相互監視, 新自由主義の綻び, 各首長の政策のとり方	3
E	グローバル社会, 「グローバル化しすぎた?」, 密集と移動	3
F	意図しない環境改善, 生活と大きな課題の遠さ, 「グローバル化」を知らず, 生物との関わり	4
G	科学的知識と政治的判断の関係, ライフスタイル, 「密集して生活」は異常, 微生物, 生物システム, 土	6

さらに Apisnote を用いて, 各人の単語をオンライン上の付箋紙(3 枚以内)に記入して, それらの付箋紙を結びつけて話し合った。

最後に「コロナ禍」と環境のかかわり—Build back better (BBB), 「元に戻さない」よりよい形での再構築の必要性を示して, 人

と文化, 社会, 自然とのつながり, 関係, 相互作用による関係性を示し, 科学文明下の社会の変革において, Society 5.0 (DX) と「新たな日常」について再確認した。

終了時のアンケートでは, 「『コロナ禍』と環境のかかわりについて, なにか『気づき』はありましたか」の問いにそれぞれのチャットにより発言した。「海外と国内での対応の違いについて理解している人が多いと感じた」「科学者と政治家の話。科学的判断と政治的判断の話は大事だと思う」「原発事故の際に策案された科学的提言と政治についての取り決めについて初めて知りました。このようなものがこのコロナ禍の中でも作られていくと良いな, と思います」のような回答があった。

また, 「環境カフェオンラインで取り上げて欲しいテーマがあれば発言してください」の問いでは, 「地球温暖化対策推進本部による日本の NDC(国が決定する貢献)について」「『科学が言っていることは何か?』『政治的により良い決断は何か?』という違いを考えたい」「パリ協定の 2 度目標も政治的判断。原発事故後の『科学』『政治』の関係に関する反省は初めて知ったので今後も議論したい」「『保全すべき生態系』とは何か」のような回答がえられた。

今回は, 大学院生と社会人 7 名の参加での開催になった。コロナ禍において環境カフェの目的である「人間であること」「いかに生きていくか」についてそれぞれが考えるきっかけになったと思われた。

4. 九大でのオンライン開催の取り組み

九大では, 大学の講義, ならびにサークル団体における出前授業や活動イベントなどにおいて, 多様な文化的背景や学問的背景を共有することを目的に「環境カフェ」を利用してきた。九大サークルでも, 学部学生を対象に「環境問題は人間問題」などの 6 つのテーマ(多田 2018a)により, 伊都キャンパス中央

図書館などで対面により実施してきた。

2020年からのZoomによるオンライン方式での「環境カフェ」の取り組みは、Apisnoteを活用することで、各参加者の「回答」(単語)をオンライン上の付箋紙の色分けによって、より判別しやすくてできるように改良した。同時に、オンライン上の付箋紙の連結と解結の機能を活用することで、それぞれの単語とテーマとの関連性を各人が円滑に転換できるようにした。これによって、各人のテーマに対する理解と共感の変化を可視化することが可能となった。

また、実施時間を対面の90分からオンラインでは60分、または30分に短縮することで、大学の講義や課外活動の出前授業やサークル活動でもより円滑に活用できるように整えた。

このようなオンライン方式の「環境カフェ」は、日本語でSDGsについて学ぶことを目的とした留学生クラスの講義に導入された。これによって、講義の2回に1回の頻度で30分、または60分の実施時間で、「環境カフェ」はこれまでに延べ14回(延べ人数168人)開催された。

講義の参加者は、日本人学生だけではなく、中国やベトナム、ミャンマー、フィリピン、インドネシアなどアジア地域の留学生であり、学部1年から修士2年まで幅広い年代の学生で構成されている。また、水問題や貧困問題、気候変動問題、エネルギー問題、食糧問題など、どの地域においても関連するSDGsをテーマに実施した。

開催後のアンケートでは、理解できたおよび共感できた点は、「それぞれの目標に関して大学の講義で学ぶだけではなく、自分の生活にどのように落とし込むことができるのか理解できた」「SDGsのゴールは世界各国でその重要性は違っており、自分ができることが多くあることをほかの参加者から知ることが共感できた」などの回答がえられた。

また、感想では「従来の一方向の講義では

なく、ライブ形式による自分の発言がそのままクラス全体に共有されることから、参加していて楽しい」「自分の意見が先生だけではなく、学生からも意見が返ってくることから大学にいるような感覚を持てた」「オンラインの講義で積極的に参加して、いろいろなことを話したい講義だった」などの回答がえられた。

講義でのSDGsをテーマとした「環境カフェ」による社会対話は、「相互理解を基調に置く多様性の容認と尊重・活用による叡知の共創にある」という共創型対話(多田 2006)の基本理念に沿ったものであり、留学生と日本人学生という文化的背景の異なる学生で構成された参加者による「環境カフェ」の開催は、対面方式(多田・田中 2020a)と同様にオンライン方式においてもその実践を示した事例であると考えられた。

5. おわりに

「環境カフェ」は、専門家と市民が対話の過程でともに理解と共感をえる(自分ごとと捉える)ことを目的としている。その結果、問題意識や価値観を共有できるようになるのである。この共感とは五感を通してだけではなく、身体表現をともなったコミュニケーションを通して得られるものである。

最近では、SNSを通してだれとでも手軽にコミュニケーションがとれるネット社会によって、一見、コミュニケーションが濃密化したように見えながら、実は、身体を置き去りにしたコミュニケーションではそれが逆に希薄化し、身体レベル(身体表現)の共鳴による共感が起き難くなっていることを、認知脳科学の観点から指摘されている(嶋田 2017)。

そこで、Zoomによる「環境カフェオンライン」でもつぎのような工夫をしてみることが良いと考えられる。「ビデオ画面をOFFにしない」「表情をゆたかにする」「普段より大きくあいづちをうつなどのリアクションをする」「相手の非言語表現(表情やしぐさなど)も

観察する」「『そうなんですね』など、言葉でのリアクションをきちんとする」。

最後に「環境カフェ駒場」の第2回のレポートにあるように時間90分で4, 5名の参加による開催が適当であるとされた(多田2019)。その一方で、「第3回環境カフェ本郷」のように開催時に12名の参加の際には、それぞれ6名の2つのグループに分けて時間をずらして2度の開催となった(多田2018b)。

一方、オンライン方式の場合には、参加人数が多くなってもZoom会議を同時に複数設定することも可能である。また、「Remo Conference」のような複数のグループでの同時開催が可能なオンライン会議ツールを用いることもできる。さらに今後は、このようなオンライン方式とともにハイブリッド方式(現地開催およびオンライン開催の併用)についても検討していきたい。

謝辞

「第4回環境カフェ京都オンライン」と「第12回環境カフェ本郷オンライン」、「第1回環境カフェオンライン」、ならびに九大でのオンライン開催に参加して下さった学生と社会人の皆さまにお礼申し上げます。

参考文献

国立研究開発法人国立環境研究所, 2020, 社会対話「環境カフェ」—科学者と市民の相互理解と共感を目指した新たな手法, 環境儀, 76, 16pp.

嶋田総太郎, 2017, 認知脳科学, コロナ社, 東京, 192pp.

多田孝志, 2006, 対話力を育てる—「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション, 教育出版, 東京, 232pp.

多田満, 2018a, 社会対話の実践—「環境カフェ」を例に, 環境科学会誌, 31, 207-216.

多田満, 2018b, 社会対話「環境カフェ」の実践—「環境カフェ本郷」の開催を例に—, 日

本環境教育学会関東支部年報, 12, 17-20.

多田満, 2019, 社会対話「環境カフェ」の実践—「環境カフェ駒場」の開催を例に—, 日本環境教育学会関東支部年報, 13, 39-44.

多田満・田中迅, 2020a, 社会対話の実践「環境カフェ」とSDGsのかかわり, 日本環境教育学会関東支部年報, 14, 41-46.

多田満・田中迅, 2020b, 社会対話「環境カフェ」の5年間の歩み, 日本環境教育学会第31回年次大会.

多田満・戸祭森彦, 2018, 科学と文学による社会対話「環境カフェ」の実践—「『海辺』の生態学」をテーマに—, 環境教育, 28(1), 30-33.

Tanaka, J., Tada, M., 2020a, Environmental dialogue, *Kankyo cafe and SDGs*, International Conference of Sustainable Development (ICSD).

Tanaka, J., Tada, M., 2020b, The *Kankyo Cafe* method of environmental dialogue and SDGs, Youth Environmental Alliance in Higher Education (YEAH).

田中迅・多田満, 2020, 「学生主体でグリーンインフラの普及啓発を目的に」環境対話イベント, グリーンインフラネットワーク・ジャパン全国大会 (GIJ2020).

暉峻淑子, 2017, 「対話の定義」, 『対話する社会』, 岩波書店(岩波新書), 東京, 87-94.